

模倣と独立

夏目漱石

青空文庫

今日ははか図らず御招きにあずか預りまして突然参上致しました次第であります。私は元この学校で育つた者で、私にとつてはこの学校は大分縁故えんこの深い学校であります。にもかかわらず、今日までこういう、即ち弁論部の御招待に預つて、諸君の前に立つた事は御座いませんでした。尤ももつと御依頼も御座いませんでした。また遣やる気もありませんでした。ただ今私を御紹介下さつた速水君はやみは知人であります。昔は御弟子で今は友達——いや友達以上の偉人でもあります。しかし、知り合あひではありますけれども、速水さんから頼まれた訳でもありません。今度私が此処ここに現われたのは安倍能成あへよししげという——これも偉い人で、やはり私の教えた人であります。——その人が何でも弁論部の方と御懇意ごこんいだというので、その安倍能成君を通じての御依頼であります。その時私は実は御断りをしたかった。というのは、近來頭の具合が悪い。というよりも、頭の働き方がこういう所へ参つて、組織立つた御話をするに適しないようになっております。——一口に言えば、面倒臭めんどうくさいので、一応は御断りを致したのであります。けれども私の断り方がよほど正直だったので、——是非遣らなければならぬならば出るが、まあどうか許してもらいたい——こういう風に返辞をした。ところが是非遣らなければならぬから出る、というのです。後から考えると、余り私が正

直過ぎたと思ひます。尤も、是非遣らなければならんというのはどういふ訳だ、といつて
問ひ詰めるほどの問題でもありませんから、遣らなければならんものとして出て参りまし
た。安倍君は君子であります。頼んだ事は引き受けさせようという方の君子。速水君も君
子であります。これは頼まない方の君子、遠慮された方の君子であります。そういう訳
で今日は出ましたので、演説をする前に言訳がましい事をいふのは甚だ卑怯なようであ
りますけれども、大して面白い事も御話は出来なひと思ひますし、また問題があつても、
学校の講義見たように秩序の立つた御話は出来兼ねるだらうと思ひます。安倍君曰く、何
を言つたつて構ひません、喜んで聴いてゐるでしょう。

それに、私は此校で教師をしてゐたことがあります。その時分の生徒は皆恐らく今此所
には一人もいないでしょう、卒業したでしょうけれども、しかし貴方がたはその後裔と
いひますか、跡継ぎ見たような子分見たような者で、その親分をこの教場で度々虐めてい
た事などがあるから、その子か孫に当るような人などは何とも思つておらんので、チャ
ンと準備をして出て来るほど旨く行かなかつた。

私は教師としてこの学校に四年間おりました。のみならずその以前には、貴方がたのよ
うに、生徒としてこの学校に——何年間おりましたか知らん——落第したと思つちやいけ

ません。元々私は此所へ這入つて来たのじゃない。この学校が予備門と云つて丁度一ツ橋
 外そとにありました。今の高等商業のある界限かいがい一面がこの学校兼大学であつた。明治十七年、
 貴方がたがまだ生れない先、私は其所へ這入つたのです。それから——実は落第しており
 ます。落第して愚図愚図ぐずぐずしている内にこの学校が出来た。この学校が出来て最も新らしい
 所へいの一い番に乗り込んだ者は私——だけではないが、その一人は確かに私である。われ
 われの教室は本館の一い番北の外はずれの、今食堂になつてゐる、あそこにあります。文科の
 教室で。それが明治二十二年位でした。その時分の事を今の貴方がたに比べると、われわ
 れ時代の書生というものは乱暴で、よほど不良少年という傾き——人によるとむしろ氣概きがい
 があつた。天下国家を以て任じて威張いばつておつた。われわれの年配の人は、いつも今の若
 い者はというような事をいつては、自分たちの若い時が一番偉かつたように思つてゐるけ
 れども、私はそうは思わない。今でもそうは思わない。貴方がたの前に立つてこうして御
 話をするときは、なおそう思わない。貴方がたの方がわれわれ時代の者よりよほど偉い。
 先刻さつきから偉い偉いということを速水君が言われましたが、貴方がたの方が遙はるかに大人おとなしい、
 能く出来てゐると思ひます。われわれは実に乱暴であつた。その悪戯いたずらの例はいくらもあ
 ります。それを御話するために此処へ登つたんじゃないが、如何にわれわれが悪かつたか

ということを懺悔ざんげするために御話するのであるから、その真似をしちやいけませんよ。現に彼処あそこに教場に先生の机がある。先ず私たちは時間の合間合間あいまに砂糖わりの豌豆えんどうまめを買って来て教場の中で食べる。その豌豆が残るとその残った豌豆を先生の机の抽斗ひきだしの中に入れて置く。歴史の先生に長沢市蔵という人がいる。われわれがこれを渾名あだなしてカッパードシヤといっている。何故カッパードシヤというかという、なんでもカッパードシヤとか何とかいう希臘ギリシヤの地名か何かある。今は忘れてしまいましたが、希臘の歴史を教える時、その先生がカッパードシヤカッパードシヤと一時間の内幾回となく繰り返す。それでカッパードシヤという渾名が付いた。この長沢先生の時間と覚えておりますが、その先生がカッパードシヤカッパードシヤとボールドへ書くので、そのカッパードシヤを書くうとしてチヨークを捜すために抽斗を明けると、その抽斗の中から豆ががらがらと出て来たというような話がある。これは先生を侮辱ぶじよくした訳ではありません、また先生に見せるためにわざわざ遣ったのでもありませんが、とにかくよほど予備門などにおったわれわれ時代の書生の風儀ふうぎは乱暴でありました。現にこの学校の中を下駄げたで歩くのです。私も下駄すぎょうらで始終歩いた一人で、今はついでだから話しますが、私が此所に這入った時に丁度杉浦すぎょうら重剛しげたけ先生が校長で此所ここの呼び者になつていた。この時二十八歳だったかと思ひます。大

変若くて呼び者であったが、暫くするとこういう貼出しはりだしが出ました。学校の中を下駄はを穿はいて歩いてはいけない。それは当然の事ですが、わざわざ貼り出さなければならんほど下駄を穿いて歩いていたものと私は考える。然しかるに貼出しがあつて暫くしても、私は下駄を穿いて歩いていた。或日の事、丁度三時過ぎです。今頃で、もう誰もいまいと思つて、下駄を穿いて、威張つて歩けと思つて、ドンドン歩いて行つた。すると廊下を曲る途端とたんに杉浦重剛さんにパタリと出会つた。私は乱暴書生ではない。極ごく気の小さい大人しい者である。杉浦さんに出会つてどうしたと思います。私は急に下駄から飛び降りた。飛び降りたばかりではありません、飛び降りていきなり下駄を握つかつて一目散いちもくさんに逃げ出しました。だから一口も叱られもせずまた捉つかまえられもせず済んでしまつた。これは唯自分で覚えてゐるだけで人に話した事はありません、今日初めて位のものでありますが、この間あいだ或所で杉浦先生に久々ひさびさぶりで御目に掛つた。大分先生も年を取つておられる。その時私が、先生こういう事を覚えて御出おいでですか、私は下駄を穿いて歩いてこううだつたと御話したら、杉浦さんは、いやそれはどうも大変な違ちがいだ、私は下駄を穿いて学校を歩くことは大賛成である、穿はいちやあならんという貼出しが出たのは、あれは文部省が悪い。とかく文部省はやかましい事を言うが、私はその下駄論者だつたと言う。私も驚いて、杉浦さんが

下駄論者だと仰しやるのはどういう訳ですかと聞くと、先生の曰く、そもそも下駄は齒が二本しかない、それでいくら学校の中を下駄で歩いたところで、床に印する足跡というものは二本の齒の底だけである、しかるに靴は踵から爪先まで足の裏一面が着くじやないか。もしこれが両方とも同じ程度に汚すのであるならば、学校の床を汚す面積は靴の方が下駄より遥かに偉大である、だから私はその下駄で差支ないということをしきりに主張したが、どうも文部省の当局が分らないから、それでやむをえずああいう貼出しをした。それじゃ私は逃げる所でなかつた大いに賞められて然るべきであつた惜しい事をした、といつて笑つた。その時分は杉浦さんも二十八位でまだ若かつたから暴論を吐いて文部省を弱らせたのでしよう。下駄の方が宜いという訳はないと考えるのです。まあそういうような時代を貴方がたが想像したら、随分乱暴な奴が沢山おつたということが御分りになるでしょうが、実際今よりも悪い悪戯な奴が沢山おつた。ストーブをドンドン焚いて先生を火攻にしたり、教場を真闇にして先生がいきなり這入つて来ても何処も分らないような事をしてたり、そういう所を経過して始めて此校へ這入つたものであります。

それから此校に二年ばかりおつて、大学に入つて、大分御無沙汰をして、それから外国に行きまして、外国から帰つて来て、復た此校へ這入つた。故郷へ錦を着るといふほどで

もないが、まあ教師になつて這入つた。そうして初めて教えたのが、今いう安倍能成君らであります。此校ここを出て、大学を出て、諸方を迂路うろついている時に教えたのが、此処ここにいる速水君であります。速水君を教える時分は熊本で教員生活をしておつた時で、漂泊ひょうはく生せいでありました。速水君を教えていた時分は偉くなかった、あるいは偉い事を知らなかったか、どつちかでしょう。とにかく速水君を教えた事は確かであります。形式的に。無論偉くない人だから本統ほんとうに啓発するほど教えなかつたが、教場に立つて先生と呼ばれ、生徒と呼んだことは確かにある。なお自白すれば、熊本に來たてであります。私の前に誰か英語を受持つておつて、私はその後を引受けた。エドモンド・バークの何とかいう本であります。それは私の嫌きらな本です。これ位解らない本はない。演説でも英吉利人イギリスが解るものならば日本人が字引を引いて解らないことはないはずである。が、實際解らない本です。その解らない物を教えた時に丁度速水君が生徒だったから、偉くない偉くないという考えが何時いつまでも退のかないのかも知れません。それでその後英語も大分教えて年功ねんこうを積みましたが、速水君に断りますが、その後発達した今日の私の英語の力でも、あのバークの論文はやはり解らない。嘘だと思ふなら速水君があれを教えて御覧になれば直すぐ分る。——こんな下らない事を言つて時間ばかり経つて御迷惑であります。——

めに、そういう事を言うのであります。大した問題もありませんから。

それで、先刻演題という話でしたが、演題というようなものはないから、何か好加減いいかげんに一つ題は貴方がたの方で後で拵こしらえて下さい。チョツと複雑過ぎて簡単な題にならんような高尚な事なんだろうと思う。何か御話しようと思いましたが、実は先刻申上げたような訳で、時間もなし、今日も人が来ますし、チツとも考えられない。それだからいう事は余り大した事ではありません。が、もう少しの間、極ごく雑ざつとしたところを御話して御免蒙ごうむる事にしましょう。

私はこの間あいだ文展ぶんてんを見に行きました。（私は御存知の通り、職業が職業ですから、御話する事は一般の事でも、あるいは文芸ということが例になったり、またその方から出しゅつ立たつする事が多いかも知れませんが、その方に興味のない方かたには御気の毒ですが、まあ仕方がない、御聴きを願います。）で、今申しましたように、この間あいだ文展ぶんてんを見に行きました。それで文展を見てチョツと感じました。どうも私は文部省の展覧会に反対をしたり、博士を辞したり、甚はなはだ文部省に受けが悪い人間であります。今度の文展も公おおやけには書きませんでした。どうも大変面白くありませんでした。殊に私は日本画の方で、まあそうだと思います。西洋画の方についてもいえませんが、その方は後にして置いて、日本画の

方について申します。

一向いっこう面白くなかった。あの画の内うちどれを見ても面白くない。中には例外はありますけれども、どれを見ても面白くない。唯面白くないといつても分らぬから、訳をいわなくちやならんが、どれを見てもノツペリしている。ノツペリしているという意味は御手際おてぎわが好いというので、褒ほめているのかといえ、そうではない。悪く言う意味で、御手際が大變好いのです。言葉を換えていえば、腕力はある、腕の力はある。それじゃ何処が悪いかといえ、頭がない。頭がなくて手だけで描いている。職人見たようなものである。そうまでいうと御氣の毒だから、それだけは公にしません。——これだけ公にしていれば沢山だが——私は別に画家や文展の非難を遣やつているわけではありません、画家を個人的に悪口を言っている訳ではありません。ただ感じた事についてチョツと必要だから申すのでありますが、唯ノツペリとしている。例えばシミがなく、マダラがなく、ムラがなく、仕上げが綺麗に出来ている。ああいう手際というものは、丁稚奉公ていぢほうこうをして五年十年遣やらなければ出来ないでしょうけれども、それ以外に何かあるかと聞かれても、私には分らない。丁度人間でいいますと、やはり紳士というものに能よく似ていると思う。紳士とはどんな者かという、紳士というものは、唯ノツペリしている。顔ばかりじゃありません。マナーが—

—態度及び挙止動作が——ノツペリしている人間で、手を出して握手をしたりする。下層社会の女などがよくあの人は様子が宜いということをいうが、様子が宜い位で女に惚れられるのは、男子の不面目だと思えます。様子が宜いというのは、人を外らさないということになる。唯御座なりを言うということになる。余りブツキラボーでない、当り触りが宜いというので御座います。鮮かて穩かて寔に宜い。それは悪い事とは思いません。そういう人に接している方が野蛮人に接しているよりは宜い。一口感情を害しても直ぐに擲られるというような人より宜い。それを攻撃する訳じやありませんが、しかしそれだけでは人格問題じやない。人格問題じやないというのは——随分悪い事をして、人の金をただ取るとか、法律に触れるような事をしないまでも非道いずるい事をしたり、種々雑多な事をやつて、立派な家に這入つて、自動車なんぞに乗つて、そうして会つて見ると寔に調子が好くて、品が好くて、ノツペリしている。そうして人格というものはどうかというと、余り感服出来ない人が沢山あります。それが紳士だと思つてはいけません。けれどもそういう者が紳士として通用している。つまり人格から出た品位を保っている本統の紳士もありましょうが、人格というものを度外どがいに置いて、ただマナーだけを以て紳士だとして立派に通用している人の方が多いでしょう。まあ八割位はそうだろうと思えます。それ

で文展の絵を見てどっちの方の紳士が多いかというところ、人格の乏しい絵だ。人格の乏しい絵だといって、何も泥棒が絵描になつてゐるといふような訳ではない。そういう侮辱の意味じゃない。けれども尊敬した意味じゃ無論ない。大変どうも頭が——何といつて宜い（よ）か——気高（けだか）いというものが無い。御覧になつても分る。気高（けだか）いといふことは富士山や御釈迦（おしやくか）様や仙人などを描いて、それで気高（けだか）いといふ訳じゃない。仮令（たとい）馬を描いても気高（けだか）い。猫をかいいたら——なお気高（けだか）い。草（そう）木（もく）禽（きん）獸（じゆう）、どんな小さな物を描いても、どんなインシグニフィカントな物を描いても、気高（けだか）いものはいくらもありません。そういうような意味の絵にはどうも欠乏し切つてゐるのが文展である。これを逆にいふと、そういう絵を排斥しているのが文展である。こういう訳であるから、それが一列一帯にチャンと御手際だけは出来ておらないといけない。御手際が出来ない物は皆落第する——のですかどうか分からないが、とにかくそういうことを私は文展において認め、かつその文展における絵の特色と人間の特色と相對していわゆるゼントルマンに比較して考えたのであります。

それからその次に或人（ある）が外国から歸つて展覽会を開いた、それを見に往きました。二人でありました。その一人の絵を見ると、油絵で西洋の色々な絵を描いてゐる。アンプレツシヨニストのような絵も描いてゐる。クラシカルな、ルーベンスなどに非常に能く似たよ

うな絵も描いている。仏蘭西派であるが、あれを公平に考えて見ると、彼の人は何処に特色があるだろう。他人の絵を描いている。自分というものが何処にもないようですね。巧い拙いにかかわらず、他人の描いたようなものはいくらでも描くんですが、それじゃ自分は何所にあるかという、チョツと何所にあるか見えないような絵を展覧会で見せられました。その次にもう一つの外国から帰った人の絵を見た。それは品の宜い、大人しい絵でした。それで誰が見ても、まあ悪感情を催さない絵でありました。私はその中の一つを買って来て家の書齋に掛けようかと思いましたが、止しました。けれども、まあ買っても宜いとは思いました。何故買っても宜いといいますと、相当に出来ているからです。内へ持つて来て掛けるのは何故かという、英吉利風の絵なら絵を、相当に描きこなしておつて、部屋の裝飾として突飛でない、丁度平凡でチョツと好かろうと思つたから買つて来ようかと思つたけれども、買つて来ませんでした。その人の絵は誰が見ても習つた絵だということが分る。習つて或程度まで進んだ絵である。それだから見苦しくない、ということとは分る。その代りその作者を俟つて初めて描けるような絵は一つもないのです。例えばその内の一を選んで内に掛けるにしても、その特別な画家を煩わさないでも、外の人に頼んでも、それと同じような絵が出来そうな絵でありました。それから私はもう一つ見まし

た。これは日本にいる人で、日本にいる人の或外国の絵でありました。前の二つは帝国ホテル及び精養軒という立派な料理屋で見ました。御客様もどうも華やかな人が多い。中には振袖ふりそでを着ている女などがおりました、あんな女などに解るのかと思うほどでした。第三に見たのは、これはどうも反対です。所は読売新聞の三階でした。見物人はわれわれ位の紳士だけでも、何だか妙な、絵かきだか何だか妙な判じはんもののような者や、ポンチ画の広告見たような者や、長いマントを着て尖つたとがような帽子を被つた和蘭オランダの植民地にいるような者や、一種特別な人間ばかりが行っている。絵もそういう風な調子である。見物人も綺麗な人は一人もない。どうもその絵はそれで或程度まではチャンと整うととのてはいないと思います。しかし、自分が自分の絵を描いている、という感じは確かにしました。しかしその色の汚い方の絵は未成品みせいひんだと思えます。それだから同情もありそれを描いた人に敬意も持ちますけれども、わざわざ金を出して内に買って来て書斎に掛けようと思わない絵ばかりでありました。

こういう風に色々違う絵があるからして、その点から出立しゅったつして御話をしましょう。——それで文展の画家や西洋から帰つて来た二人は自分で自分の絵を描かない。それから今の日本の方のは自分で自分の絵は描くけれども未成品である。感想はそれだけです。ね。

それについてそれをフィロソフィーにしよう——それをまあこじつけてフィロソフィーにして演説の体裁ていさいにしようというのです。どういう風にこじつけるかが問題であります。それが旨うまく行けば聴かれそうな演説である。巧うまく行かなければそれだけの話である。まあこういう風に片付けるかという御手際の善悪などはどうでも宜よいのですから。

人間という者は大変大きなものである。私なら私一人がこう立った時に、貴方がたはどう思います。どう思うといった所で漠然たるものでありますが、どう思いますか。偉い人と速水君は思うか知らんが、そんな意味じゃない。私は往來を歩いて一人の人を捉つかまえてこう觀察する。この人は人間の代表者である。こう思います。そうでしよう神様の代表者じゃない、人間の代表者に間違ごちがいはない。禽獸きんじゆうの代表者じゃない、人間の代表者に違ちがいがない。従つて私が茲こゝにこう立っていると、私はこれでヒューマン・レースをレプレントして立っているのである。私が一人で沢山ある人間を代表していると、それは不可かん君は猫だと意地悪いぢあくくいうものがあるかも知れぬ。もし貴方がたがこういったら、そうしたら、いや猫じゃない、私はヒューマン・レースを代表しているのであると、こう断言するつもりである。異存はないでしょう。それならば、それで宜よろしい。

同時にそれだけかというところでもない。じゃ何を代表しているかというところ、その一人

の人は人間全体を代表していると同時にその人一人を代表している。詰らない話だがそうである。私はこうやって人間全体の代表者として立っていると同時に自分自身を代表して立っている。貴方がたでもなければ彼方がたでもない、私は一個の夏目漱石というものを代表している。この時私はゼネラルなものじゃない、スペシアルなものである。私は私を代表している、私以外の者は一人も代表しておらない。親も代表しておらなければ、子も代表しておらない、夫子自身ふうしを代表している。否夫子自身いなである。

そうすると、人間というものはそういう風に二通りを代表している——というごへいと語弊があるかも知れませんが——二通りになるでしょう。其処そこです其処です、それをいわないと能く解よらない。

それでこのヒューマン・レースの代表者という方から考えて、人間という者はどんな特色、どんな性質を持つているか。第一私は人間全体を代表するその人間の特色として、第一に模倣まぼということことを挙げたい。人は人の真似をするものである。私も人の真似をしてこれまで大きくなつた。私の所の小さい子供なども非常に人の真似をする。一歳違いの男の兄弟があるが、兄貴あにが何か呉くれるといえいば弟も何か呉くれるという。兄あにが要いらないといえいば弟も要いらないという。兄あにが小しょう便べんがしたいといえいば弟も小しょう便べんをしたいという。それは実

にひどいものです。総すべて兄のいう通りをする。丁度その後から一步一步ついて歩いているようである。恐るべく驚くべく彼は模倣者である。

近頃読んだ本でありませんがマンテガツツアの『フィジオロジ・エンド・エキस्पレシオン』という本の中にイミテーションということについて例を沢山挙げてありましたが、私は今一いちいち々人間という者は真似をするものであるということの沢山な例を記憶しておりませんが、茲ここ処こに二つ三つあります。例えば、一人の人が往來で洋傘を広げて見ようとすると、同行している隣りの女もきつと洋傘を広げるといふ。こういう風ある程度まではそうです。往來で空を眺めていると二人立ち三人立つのは訳はなくやる。それで空に何かあるかというと、飛行船が飛んでいる訳でも何でもない。けれども飛行船が飛んでいるとか何とかいえば、大勢の群集が必ず空を仰いで見る。その時に何か空中に飛行船でも認めしむることが出来ないとも限らない。

それほど人間という者は人の真似をするように出来ている情けないものであります。それでその、人の真似をするということは、子供の内から始まって、今言つたような些末さまつの事柄ばかりでない、道德的にもあるいは芸術的にも、社会上においてもそうである。無論流行などは人の真似をする。われわれが極ごくく子供の内は東京の者はこんな薩摩さつま飛白がすりなどは

決して着せません。田舎者でなければ着ないものでした。それを今の書生は大抵皆薩摩飛白を着る。安いからか知りませんが、皆着るようになった。それから一時白い羽織はおりの紐ひもの毛糸けいとか何かの長いのをこう——結んで胸から背負つて頸くびに掛けておつた。あれも一人遣やるとああなるのであります。私たちの若い時は羽織の紋もんが一つしきやないのを着て通人つうじんとか何とかいって喜んでいた。それが近頃は五つ紋をつけるようになった。それも大きなのが段々小さくなつたようだが、近頃どの位になつてゐるのか。私は羽織の紋が余り大きいから流行に後おくれぬように小さくした位それほど流行というものは人を圧迫して来る。圧迫するのじゃないが、流行にこつちから赴おもむくのです。イミテーターとして人の真似をするのが人間の殆ど本能です。人の真似がしたくなるのです。こういう洋服でも二十年前の洋服は余り着られない。この間あいだ着ていた人を見たけれども可笑おかしいです。あまり見つとも宜よいものではない。殊に女なんぞは、二十年前の女の写真なんぞは非常に可笑しい。本来の意味では可笑しいとは自分で思つていけないけれども、熟つくづく々見ると、やはり模倣まぼということに重きを置く結果、どうもその自分と異ことなつた物、あるいは世間と異つたものは可笑しく見えるのであります。そういう風にそれを道徳上にも応用が出来ます。それから芸術上は無論の事ですね。そんな例は沢山挙げて宜よいけれども、時間がないから略して置きます。

とにかく大變人は模倣を喜ぶものだということ、それは自分の意志からです、圧迫ではないのです。好んで遣る、好んで模倣をするのです。

同時に世の中には、法律とか、法則とかいうものがあつて、これは外圧的に人間というものを一束ひとたばにしよとす。貴方がたも一束にされて教育を受けている。十把じつぱひと一からげにして教育されている。そうしないと始末に終おえないから、やむをえず外圧的に皆さんを圧迫しているのである。これも一種の約束で、そうしないと教育上に困難であるからである。その約束、法則というものは政治上にも教育上にもソシャル・マナーの上にもある。飯を食べるのにサラサラグチャグチャは不可いけないという。そういうのはこれは法則でしょう。それから道德の法則、これは当り前の話で、金を借りればどうしても返さねばならぬようになつている。それから芸術上の法則というのがある。これがまた在来かたの日本画とか、御能おのうだとか、芝居の踊りだとかいうものには、非常に究きゆうくつ屈かたな面倒な固まつた法則があつて、動かすことが出来ないようになっております。それらの例を一一挙げると宜いのですが、それは一一挙げません。例を省はぶくと詰はぶらないものになります、早く済みますから、詰はぶらなくして早く切り上げてしまおうと思う。

それから、法則というものは社会的にも道德的にもまた法律的にもあるが、最も劇はげしい

のは軍隊である。芸術にでも総て（すべ）そういうような一種の法則というものがあつて、それを守らなければならぬように周囲が吾人（ごじん）に責めるのであります。一方ではイミテーション、自分から進んで人の真似をしたがる。一方ではそういう法則があつて、外の人から自分を圧迫して人に従わせる。この二つの原因があつて、人間というものの特殊の性というものは失われて、平等なものになる傾きがある。その意味で私なら私が、人間全体を代表することが出来る資格を有（も）ち得るのであります。

私は人間を代表すると同時に私自身をも代表している。その私自身を代表しているという所から出（しゅ）つたつ立（た）つて考えて見ると、イミテーションという代りにインデペンデントという事が重きを為（な）さなければならぬ。人がするから自分もするのではない。人がそうすれば——他人（ひと）は朝飯（あさめし）に粥（かゆ）を食（た）う俺（おれ）はパンを食（た）う。他人（ひと）は蕎麦（そば）を食（た）う俺（おれ）は雑（ぞう）を食（た）う、われわれは自分勝手に遣（や）らう御前（おまえ）は三杯（さんぱい）食（た）う俺（おれ）は五杯（ごぱい）食（た）う、というような事（こと）はイミテーションではない。他人（ひと）が四杯（よんぱい）食（た）えば俺（おれ）は六杯（ろくぱい）食（た）う。それはイミテーションでないか知らぬが、事（こと）によると故意（こい）に反対（はんたい）することもある。これは不可（い）けない。世（よ）の中には奇人（きじん）というものがあ（あ）りまして、どうも人並（ひとびら）の事（こと）をしちや面白（おもしろ）くないから、何でも人（ひと）とは反対（はんたい）をしなければ気が済（よ）まない。中には広告（こうこく）するためにやる奴（やつ）もある。普通（ふつう）のことでは面白（おもしろ）くないから、何か

特別な事をして見たいというので、髪の毛を伸ばして見たり、冬夏帽を被つて見たり——それは此処ここの生徒などにもよくある。が、あれは無頓着むとんじやくから来るのでしよう。人が冬帽を被つてかぶいるという事に気が付けば自分も被りたくなるでしょう。故意に俺は夏帽を被るといつた日にはよほど奇人きじんとなる。私のここにインデペンデントというのは、この故意を取り除ける。次には奇人を取り除ける。気が付かないのも勘定かんじようの中に這入らない。それじゃあどうなのがインデペンデントであるか。人間は自然天然に独立の傾向を有つている。人間は一方でイミテーション、一方で独立自尊、というような傾向を有つている。その内で区別して見れば、横着おうちやくな奴と、横着でない奴と、横着でないけれども分らないから横着をやつて、まあ朝八時に起きる所を自然天然の傾向で十時頃まで寐ている。それはインデペンデントには違いがないが、甚だはなはどうも結構でない事かも知れません。それは我儘、横着であるが自然でもある、インデペンデントともなるけれども、これも取り除けのぞけということになる。最後に残るのは——貴方がたの中で能く誘惑よということを言いました。人と歩調ほちようを合あわして行きたいという誘惑を感じても、如何いかんせんどうも私にはその誘惑に従う訳に行かぬ。丁度ちやうど跛を兵式へいしき体操たいそうに引き出したようなもので、如何せんどうも歩調そろが揃そろわぬ。それは、諸君と行動を共にしたいけれども、どうもそう行かないので仕

方がない。こういうのをインデペンデントとこのです。勿論それは体質上のそういう一種のデマンドじゃない、精神的の——ポジティブな内心のデマンドである。あるいはこれが道徳上に発現して来る場合もありましょう。あるいは芸術上に発現して来る場合もありましょう。精神的になつて来ると——そうですね、古臭い例を引くようですが、坊さんというものは肉食妻帯をしない主義であります。それを真宗の方では、ずっと昔から肉を食つた、女房を持つている。これはまあ思想上の大革命でしょう。親鸞上人に初めから非常な思想があり、非常な力があり、非常な強い根柢のある思想を持たなければ、あれほどの大改革は出来ない。言葉を換えて言えば親鸞は非常なインデペンデントの人といわなければならぬ。あれだけのことをするには初めからチャンとした、シツカリした根柢がある。そうして自分の執るべき道はそうでなければならぬ、外の坊主と歩調を共にしたいけれども、如何せん独り身の僕は唯女房を持ちたい肉食をしたいという、そんな意味ではない。その時分に、今でもそうだけれども、思い切つて妻帯し肉食をするということ公言するのみならず、断行して御覽なさい。どの位迫害を受けるか分らない。尤も迫害などを恐れるようではそんな事は出来ないでしょう。そんな小さい事を心配するようでは、こんな事は仕切れないでしょう。其所にその人の自信なり、確乎たる精神なり

がある。その人を支配する権威があつて初めてああいうことが出来るのである。だから親鸞上人は、一方じや人間全体の代表者かも知らんが、一方では著しき自己の代表者である。

今は古い例を挙げたが、今度はもつと新しい例を挙げれば、イブセンという人がある。

イブセンの道德主義は御承知の通り、昔の道德というものはどうも駄目だという。何が駄目かといへば、あれは男に都合の宜よいように出来たものである。女というものは眼がんちゆう中に置かないで、強い男が自分の権利を振り廻すために自分の便利を計るために、一種の制裁なり法則というものを拵えて、弱い女を無視してそれを鉄てつそう窓まどの中に押し込めたのが今日までの道德というものであるといつてゐる。それでイブセンの道德というものは二色ふたいろにしなければならぬのである。男の道德、女の道德というようにしなければならぬ。女の方から見ますれば、それが逆にまあならなければならぬといふのです。その思想、主義から出発して書いたものがイブセンの作の中にある。最も著しい例は、『ノラ』というようなものであります。それがイブセンという人は人間の代表者であると共に彼自身の代表者であるという特殊の点を發揮している。イミテーションではない。今までの道德はそうだから、たといその道德は不都合であるとは考えていても、別に仕様しようがないからまあそれに従つて置こう、というような余裕のある、そんな自己ではない。もつと特別な猛烈な自

己である。それがためイブセンは大變迫害を受けたという訳であります。無論事實不遇な人でありました。そのみならずあの人は特殊な人で、人間全体を代表しているというより彼自身を代表している方がよほど多い。そこで国を出て諸方を流浪して、偶に国へ帰つても評判が宜くないから、国へは滅多に帰らなかつた。或時国へ歸つて来た。国へ歸つても家がなから宿屋に泊つている。その時ブランドスという人がイブセンが来たから歓迎会を開こうという時、イブセンはそんな歓迎会などは御免蒙ると言っている。しかし折角の催しで人数も十二人だけだからといって、漸くイブセンを説き伏せた。面倒を省くためにイブセンの泊つている宿屋で、帝国ホテル見たようなところで開くということになり、それでいよいよ当日になつて丁度宜い時刻になつたから、ブランドスはイブセンの室に行つてドアをコツコツと叩いて、衣服の用意は出来たかと外から聞いたら、イブセン曰く衣服などは持つておらぬ、自分は決して服装などは改めた事はない。シャツを着ている。シャツといつても露西亞辺では家の中ではこんな冬の日には温度が七十度位にしてある。本でも読む時は上衣をとつている。外に出る時はこういうものを着るでしょう。それでシャツを着ているのは宜いが、みんなは燕尾服を着て来ているのだからという時、イブセンは自分の行李の中には燕尾服などは這入っていない、もし燕尾服を着なければなら

ぬようなら御免蒙るといふ。御客を呼んで、その御客が揃そろっているのに、御免を蒙られては大変だから——そんなことを言わないでどうか出てもらいたい、それじゃ出るという事になったが、ブランドスが実は十二人だった所が、段々と人数が殖ふえて二十四人になったという、そんな嘘を吐つくならもう出ないという。実に手古摺てこずらされたということをブランドス自身が書いている。そんな事で色々面倒なことがあつた末、ようよう連れて行つてチャンと坐まらせた。ところが大将たいしょう大いにふくれていて一口も口を利かない、黙もつていゝる。まだ面白い話があるけれどもまあこれ位で切り上げてしましましょう。とにかく人間を代表しても獸けだものを代表しても、イブセンはイブセンを代表してと言つた方が宜い。イブセンはイブセンなりと言つた方が當あつていゝる。そういう特殊な人であります。この話は幼稚であります、今のイブセンの道德の見解からいつても、イブセンはイミテーションという側の反対に立つた人といわなければならぬ訳であります。

それで、人間にはこの二通りの人がある。という、片方と片方は紅白見たように別れているように見えますが、一人の人がこの両面を有もつていゝるということが一番適切である。人間には二種の何とかがあるといふことを能よくいゝるものですが、それは大変間違まちがいだ。そうすると片方は片方だけの性格しか具そなえていゝないよゝうになる。議論する人はそういう風に

なるから、あとがどうも事実から出発していない議論に陥ってしまふ。とにかく二通りの人間があるということを言うが、これはこの両面を持つているというのが、これが本統ほんとうの事でしょう。いくらオリヂナルの人でもイミテーションの分子を何処かに持つている。イミテーションの側に立つて考えると、これはどういう人がイミテーターかという、要するにイミテーターというものは人の真似をする。それだから自分に標準はない。あるいはあつても標準を立て通すだけの強い猛烈な勇気を欠いているか、どつちかなのである。しかしながらインデペンデントの側の方は、自分に一種の目安めやすがある。アイデアル・セッション、それが個人的になつておつて、とにかくそれを言い現わし、それを実行しなければいても立つてもどうしてもいられない。風ふうがわ変りではあるが、人からいくら非難されても、御前おまえは風変りだと言われても、どうしてもこうしなければいられない。藪やぶ眺ならみは藪やぶ眺ならみで、どうしても横ばかり見ている。これはインデペンデントの方の分子を余計も有つている人である。だからこういう人というものは寔まことに厄やつかい介かいなもので、世の中の人と歩調を共にすることは出来ない。おい君湯に行こう、僕は水を被かぶる、君散歩に行かないか、俺は行かない座ざ禅ぜんをする、君飯を食わんか、僕はパンを食う、そういうようなインデペンデントな人になつては手が付けられない。到底一緒に住む事は困難である。しかし人に困

難を与えるから気の毒な感じがなくかという、そうではない。唯そんな事は考えていられないでしょう。それが本統のインデペンデントの人といわなければならぬ。厄介ではあるけれども、イミテートする人あるいは自己の標準を欠いていて差し障りさざわのない方が間違いがなくて安心だというような人に比べれば、自己の標準があるだけでもこつちの方がゆる恕すべく貴ぶべし——といったらどんな奴が出て来るか分らぬが、事実貴ぶべき人もありましょう。とにかくインデペンデントの人にはまあ恕すべきものがあると思うです。

元来私はこういう考えを有もっています。泥棒をして懲ちやうえき役にされた者、人殺をして絞こ首うしゅだいに臨のぞんだもの、——法律上罪になるといふのは徳義上の罪であるから公おおやけに所刑しよけいせらるのであるけれども、その罪を犯した人間が、自分の心の径路けいろをありのままに現わすことが出来たならば、そうしてそのままを人にインプレッスする事が出来たならば、総すべての罪悪というものはないと思う。総て成立しないと思う。それをしか思わせるに一番宜よいものは、ありのままをありのままに書いた小説、良く出来た小説です。ありのままをありのままに書き得る人があれば、その人は如何なる意味から見ても悪いということを行おこなつたにせよ、ありのままをありのままに隠しもせず漏らしもせず描き得たならば、その人は描いた功徳くんとくに依まつて正まに成じやうぶつ仏ぶつすることが出来る。法律には触れまます懲役にはなりません。

けれどもその人の罪は、その人の描いた物で十分に清められるものだと思う。私は確かにそう信じている。けれどもこれは、世の中に法律とか何とかいうものは要らない、懲役にすることも要らない、そういう意味ではありませんよ。それは能く申しますと、如何に傍から見て気狂じみた不道徳な事を書いて、不道徳な風儀を犯しても、その経過を何にも隠さずに銜わずに腹の中をすっかりそのままに描き得たならば、その人はその人の罪が十分に消えるだけの立派な証明を書き得たものだと思つてゐるから、さつきいったような、インデペンデントの主義標準を曲げないということは恕すべきものがあるといったような意味において、立派に恕すべきであるという事が出来ると、私は考へるのであります。しかしこういう風にインデペンデントの人というものは、恕すべく或時は貴むべきものであるかも知れないけれども、その代りインデペンデントの精神というものは非常に強烈でなければならぬ。のみならずその強烈な上に持つて来て、その背後には大變深い背景を背負つた思想なり感情なりがなければならぬ。如何となれば、もし薄弱なる背景があるだけならば、徒にインデペンデントを悪用して、唯世の中に弊害を与えるだけで、成功は出来ぬからである。

此処に成功という意味についても説明を要する。また強い背景という事についても説明

を要するが、強い背景というものは何だというと、それは別なものではありません。例えば私なら私が世の中の仕来りに反したことを、断言し、宣言し、そうしてそれを実行する。その時に、もしそれが根柢のない事を遣つてゐるならば、如何に私自身にはそれが必然の結果であり、私自身には必要であろうとも、人間として他の人のためにならない。何らの影響を与える事が出来ない。何らの影響を与える事が出来なければ、私は文字に現われたるインデペンデントであつて、その文字に現われたるインデペンデントなことをして、最後に文字に現われたるインデペンデントで死ななければならぬ。人には何らの影響を与えざるのみならず、そのインデペンデントは人の感情を害し、法則というものに一種の波動を起して、人に一種の不愉快を醸させるに過ぎないのであります。それではどんな風な深い背景を有つていなければならぬかという、例えば非常に個人主義のような仏蘭西革命でも、明治改革でも宜しゅう御座います。徳川家が將軍に成つた末で余り勢いは強くなかつたけれども、とにかく將軍というものが政權を持つておつてその上に天子様がおられるという。これは一般の法則でないという処から、習慣的に続いて来た幕府というものをつつ繰り返したというのは、その引つ繰り返るといつ時の人の胸中に同情があつて、その同情を惹き起すという事が出来なければ、あれは成功は出来ないのである。だから

ら徒いたずらにインデペンデントということは不可いけない。人間の自覚というものは一步先へ先へと来るものである。一步遅れたら人より一步遅れて歩ある行かなければならない。人は相当の時期が来ればその通りになるべき運命を持つているのだから、一步先に啓発しなければならぬ。それが強い深い背景といえはいえる。それがなければ成功は出来ない。

成功ということについて歴史などの例を挙げたが、誤解されるといけないからここに手近い例をもう一つ挙げて置きたい。学校騒動があつてその学校の校長さんが代る。この学校ではありませんよ。そうすると後に新しい校長さんが来ましょう。そうしてその学校騒動を鎮しずめに掛かる。その時は色々思案もやりましょう計画も要いりましょう。刷新さつしんも色々ありましょう。そうして旨うまく往いけばあの人は成功したといわれる。成功したというと、その人の遣やり口くちが刷新でもなく、改革でもなく、整理でもなく、その結果が宜いと、唯その結果だけを見て、あの人は成功した、なるほどあの人は偉いということになる。ところが騒動ますますが益ます大きくなる。そうすると今まで遣やつたその人の一切の事が非難せられる。同じ事を同じように遣つても、結果に行つて好ければ成功だというが、同じ事をしてても結果に行つて悪いと、直ぐにあの人の遣口は悪いという。その遣やり方かたの実際を見ないで、結果ばかりを見ていうのである。その遣方よの善あし悪あしなどは見ないで、唯結果ばかり見て批評を

する。それである人は成功したとか失敗したとかいうけれども、私の成功というのはそういう単純な意味ではない。仮令たとひその結果は失敗に終つても、その遣ることが善いことを行い、それが同情に値いし、敬服に値いする觀念を起させれば、それは成功である。そういう意味の成功を私は成功といたい。十字架の上に磔はりつけにされても成功である。こういうのは余り宜よい成功ではないかも知らぬが、成功には相違ない。これはテンポラルな意味で宗教的の意味ではない。乃木のぎさんが死にまじらう。あの乃木さんの死というものは至誠しせいより出いたものである。けれども一部には悪い結果が出た。それを真似して死ぬ奴が大変出た。乃木さんの死んだ精神などは分らんで、唯形式の死だけを真似する人が多いと思う。そういう奴が出たのは仮に悪いとしても、乃木さんは決して不成功ではない。結果には多少悪いところがあつても、乃木さんの行為の至誠であるということはあなた方を感動せしめる。それが私には成功だと認められる。そういう意味の成功である。だからインデペンデントになるのは宜いけれども、それには深い背景を持ったインデペンデントとならなければ成功は出来ない。成功という意味はそう言う意味でいつている。

それで人間というものには二通りの色合いろあひがあるということは今申した通りですが、このイミテーションとインデペンデントですが、片方はユニティー——人の真似をしたり、法

則に囚とらわれたりする人である。片方は自由、独立の径路を通って行く。これは人間のその
 バライエターを形作っている。こういう両面を持っているのではありますけれども、先ず
 今日までの改正とか改革とか刷新とか名のつくものは、そういうような意味で、知識なり
 感情なり経験なりを豊富にされる土台は、インデペンデントな人が出て来なければ出来な
 い事である。もしそれが出来なかつたならば、われわれはわれわれの過去の歴史を顧かえりみて
 如何に貧弱であるかということを考えれば、その人は如何にわれわれの経験を豊富にして
 くれたかということが能よく分るのであります。その意味でインデペンデントというものは
 大変必要なものである。私はイミテーションを非難しているのではないけれども、人間の
 持つて生れた高尚な良いものを、もしそれだけ取り去つたならば、心の発展は出来ない。
 心の発展はそのインデペンデントという向上心なり、自由という感情から来るので、われ
 われもあなた方もこの方面に修養する必要がある。そういうことをしないで生きてはい
 られません。また自分の内心にそういう要求のないのに、唯その表面だけ突とつ飛びなことを遣や
 必要は無論ない。イミテーションで済まし得る人はそれで宜よろしい。インデペンデントで働
 きたい人はインデペンデントで遣やつて行くが宜しい。インデペンデントの資格を持つてお
 つて、それを抛ほうつて置くのは惜しいから、それを持つている人はそれを発達させて行くの

が、自己のため日本のため社会のために幸福である。こういうのです。

繰り返して申しますが、イミテーションは決して悪いとは私は思っておらない。どんなオリヂナルの人でも、人から切り離されて、自分から切り離して、自身で新しい道を行ける人は一人もありません。画かきの人の絵などについて言っても、そう新しい絵ばかり描けるものではない。ゴーガンという人は仏蘭西フランスの人ですが、野蛮人の妙な絵を描きます。

仏蘭西に生れたけれども野蛮地に這入って行って、あれだけの絵を描いたのも、前に仏蘭西におった時に色々の絵を見ているから、野蛮地に這入ってからあれだけの絵を描くことが出来たのである。いくらオリヂナルの人でも前に外の絵を見ておらなかつたならば、あれだけのヒントを得ることは出来なかつたと思う。ヒントを得るといふこととイミテーションということとは相違があるが、ヒントも一歩進めばイミテーションとなるのである。しかしイミテーションは啓発するようなものではないと私は考えている。

それから、イミテーションは外圧的の法則であり、規則であるといふ点から、唯ただ打ち毀こわして宜よいというものではない。必要がなくなれば自然に毀れる。唯、利益、存在の意義の軽けい重じゆうによつて、それが予期したより十年前に自ら倒たふれるか、十年後に倒れるかである。またオリヂナルの方が早く自然に滅亡するか、イミテーションの方が先に滅亡するかであ

つて、大した違いはない。片方だけを悪いとは決して言わない。両方とも各々 《おのおの》存在するには存在すべき理由があつて存在しているのである。殊に教育を受ける諸君の如きものに向つて規則をなくしたらとても始末が付かない。また兵式体操なども出来ない。子供の内は親のいうことばかり聞いておつても、段々一人前いちにんまえになつて来るとインデペンデントというものは自然に発達して来る。また発達しても然しかるべきような時期に到着するのであります。一いちが概に唯インデペンデントであるということを中心とするのではないのであります。

けれども近來の傾向を見て、世の中の調子を見て、大体はインデペンデントに賛成である。今日の状況を以て学校の規則を蔑視して自分勝手にしろとものではありません。それは別問題ですが、今の日本の現在の有ありさま様から見ても、どっちに重きを置くべきかという点、インデペンデントという方に重きを置いて、その覚悟を以てわれわれは進んで行くべきものではないかと思う。われわれ日本人は人真似をする国民として自ら許みづかしている。また事実そうなつてゐる。昔は支那の真似ばかりしておつたものが、今は西洋の真似ばかりしてゐるといふ有様である。それは何故かという点、西洋の方は日本より少し先へ進んでゐるから、一般に真似をされてゐるのである。丁度あなたの方のような若い人が、偉い人

と思つて敬意を持つてゐる人の前に出ると、自分もその人のようになりたいと思つ——か
どうか知らんが、もしそう思うと仮定すれば、先輩が今まで踏んで来た径路を自分も一通
り遣らなければ茲^{ここ}に達せられないような気がする如く、日本が西洋の前に出ると茲^{ここ}に
達するにはあれだけの径路を真似て来なければならぬ、こういう心が起るものではない
かと思ふ。また事実そうである。しかし考えるとそう真似ばかりしておらないで、自分か
ら本式のオリヂナル、本式のインデペンデントになるべき時期はもう来ても宜^{よろ}しい。また
来るべきはずである。

日露戦争というものは甚^{はなは}だオリヂナルなものであります。インデペンデントなものであ
ります。あれをもう少し遣つておつたならば負けたかも知れない。宜^{よろ}い時に切り上げた。
その代り沢山金は取れなかつた。けれどもとにかく軍人がインデペンデントであるとい
うことはあれで証^し拠^つ立てられている。西洋に対して日本が芸術においてもインデペンデント
であるという事ももう証^し拠^つ立てられても可^よい時である。日本は動^やもすれば恐^き露^{よう}病^びに罹^か
つたり、支那のような国までも恐れているけれども、私は輕蔑^{けいべつ}している。そんなに恐しい
ものではないと思つている。これはあなた方を奨励^{しょうれい}するためにこういうことを言つて
いるのである。それからまた日本人は雑誌などに出るちよつとした作^{さく}物^{ぶつ}を見て、西洋のもの

と殆ど比較にならぬというが、それは嘘です。私の書いた小説なども雑誌に出ますが、それをいうのじやない。間違えられては困る。それ以外のもので、文壇の偉い人の書いたものは大抵偉いのです。決して悪いものじやありません。西洋のものに比べてちつとも驚くに足らぬ。唯^{たて}豎に読むと横に読むだけの違いである。横に読むと大変巧いように見えるというのは誤解であります。自分でそれほどのオリヂナリテ^イを持っていながら、自分のオリヂナリテ^イを知らずに、あくまでもどうも西洋は偉い偉いと言わなくても、もう少しインデペンデントになつて、西洋をやつつけるまでには行かないまでも、少しはイミテ^イションをそうしないようにしたい。芸術上ばかりではない。私は文芸に關係が深いからとか文芸の方から例を引くが、その他においても決して追^おつ着^つかないものはない。金の問題では追^おつ着^つかないか知らぬが、頭の問題ではそんなものではないと思つてゐる。あなた方も大学を御遣^おりになつて、そうして益^{ます}インデペンデントに御遣^おりになつて、新しい方の、本当の新しい人にならなければ不可^いけない。蒸^む返^{かえ}しの新しいものではない。そういうものではない。

要するにどっちの方が大切であろうかという、両方が大切である、どっちも大切である。人間には裏と表がある。私は私をここに現わしていると同時に人間を現わしている。

それが人間である。両面を持っていなければ私は人間とはいわれなと思う。唯どつちが今重いかというと、人と一緒になつて人の後に喰つ付いて行く人よりも、自分から何かしたい、こういう方が今の日本の状況から言えば大切であるうと思ふのであります。

文展を見てもどうもそつちの方が欠乏しているように見えるので、特にそういう点に重きを置いて、御参考のために申し上げたような次第であります。

(第一高等学校校友会雑誌所載の筆記による)

——大正二年十二月十二日第一高等学校において——

青空文庫情報

底本：「漱石文明論集」岩波文庫、岩波書店

1986（昭和61）年10月16日第1刷発行

1998（平成10）年7月24日第26刷発行

※底本で、表題に続いて配置されていた講演の日時と場所に関する情報は、ファイル末に地付きで置きました。

入力：柴田卓治

校正：双沢薫

2001年3月26日公開

2004年2月28日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

模倣と独立

夏目漱石

2020年 7月17日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>